

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

言語心理学で何を学べるか？：言語学との学問イメージ比較

著者	福田 由紀, 原 遥, 菊池 理紗
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	76
ページ	115-127
発行年	2018-03-13
URL	http://hdl.handle.net/10114/13772

言語心理学で何を学べるか？

— 言語学との学問イメージ比較 —

福田 由紀・蘆原 遥・菊池 理紗

要 旨

本研究では、未習者と既習者が抱えている言語心理学への学問イメージを、同じく言語に関する学問分野である言語学への学問イメージと比較して探索的に検討した。実際に学ぶことができる内容を両学問分野より16項目ずつ32項目を用意した。それらについて、各学問分野において学べると思う項目を大学生172名に複数選択させた。学習経験の有無別に各学問分野についてコレスポネンデンス分析を行い、4群を比較した。その結果、両学問分野とも未習者の学問イメージは拡散していた。また、項目選択率を比較した結果、言語心理学は言語学よりも学べる範囲が狭い学問分野だと捉えられていた。他方、既習者は未習者よりも項目の判別精度が高く、学習経験の影響が認められた。既習者の学問イメージは両学問分野ともに未習者よりも明確であった。言語心理学の学問イメージは言語心理学由来の項目のみで、一方、言語学の学問イメージは両分野由来の項目で構成されていた。つまり、学習経験により、言語心理学は言語活動を理解するための法則を追求する学問分野であるという実態により近いイメージに収束した。

キーワード：言語心理学，言語学，学問イメージ，コレスポネンデンス分析

問題の所在と目的

心理学は、実態とイメージに乖離のある学問である。そのため、心理学という言葉や学問分野に対するイメージ研究がこれまでいくつも行われてきた。例えば、心理学の未習者は、心理学という言葉から、「心がわかる」といった心に関するイメージや「犯罪捜査に使える」といった実用面を思い浮かべることが多い（松井，2000）。しかし、その一方で、心理学という学問分野に対しては、具体的なイメージを持っていない（五十嵐・平尾・中村，1999；高島・中村，2002）。あるいは、カウンセリングのような臨床心理学をイメージしている（松井，2000）。加えて、林（2013）では、心理学は基本的には文系だが、理系的な先進性を

備えた中間学問と捉えられていることが示された。他にも、未習者は心理学を学ぶことで、他者との関係についての悩みが解決されると考えている（工藤・鈴木・小林，2004）。したがって、心理学のような実態とイメージに差異がある学問分野に対し、そのイメージを調査することは大いに意義があるといえる。

また、学習によって学問イメージは変化する。心理学専攻の学生は、進級にしたがい、心理学は科学的で理系的であるという印象を強く抱くようになる反面、「カウンセリング」や「人間理解」、「コミュニケーションスキル」は学べないと考えられるようになった（岩崎・大橋・皆川，2012）。さらに、心理学に関連する講義を受講する前の学生は、心理学を「心の探求」や臨床心理学的側面を学べる学問だと考えていたが、受講後の約半数の

学生は「人間の行動とその要因」を学ぶ学問だと考えるようになった（松井，2000）。これらは、学習によって学問イメージがより実態に近く変化することを示唆している。言い換えれば、学習によってイメージと実態との乖離が小さくなる。

このように、学習者は特定の学問イメージを持っている。良い学問イメージを持っている学生の場合、学問に対する取り組みや教員に対する親近感、学部に対する居場所感が高い（小川・植村・元吉・吉田，2001；植村・小川・吉田，2001）。しかしながら、学問イメージは学習によって変化する。よって、学生がある学問分野を学習するにしたい、学べると思っていた事柄が実際には学べないことに気づく場合もある。このような学問イメージと実態の乖離は、学校不適応の理由の一端になる可能性がある。この問題を防ぐためには、進路選択時に、まだ特定の学問を学んでいない人の学問イメージと実態との乖離をできるだけ小さくしておくことが必要だと考えられる。また、進路選択の場面では、特定の学科に行きたいという希望よりも、学びたい事柄が優先されるだろう。進路選択や学校適応を考えると、類似している学問分野間の違いがどこにあるかを明確にする必要がある。

例えば、ある人が言語を使う人間の認知活動について学びたい場合、該当する学問分野は言語心理学である可能性が高い。しかし、言語に関する学問分野は言語学や日本語学・国語学、英語学、国語教育学、日本語教育学など多岐に渡り、未習者には学問が対象とする範囲の差異は不明瞭であろう。したがって、本研究では言語心理学のイメージを取り上げ、他の学問分野と比較しながら検討することを、第一の目的とする。なお、日本語学・国語学や英語学は、特定の言語名を含んでおり、それを対象としているイメージを喚起させる可能性があるため、今回の比較対象からは除外した。また、国語教育学や日本語教育学は、教育のイメージを喚起させる名称のため、比較対象から除外した。よって、言語心理学のイメージを検討する際の比較対象として、言語学を用いる。心理学の一

分野である言語心理学よりも、言語学の方がその包括する範囲は広い。しかし、両学問分野の未習者にとって、言語に関することを学べる点では、類似した学問であると思わせるだろう。

また、本研究における第二の目的として、未習者と既習者のイメージを比較し、学習によって言語心理学へのイメージがどのように変容するかを検討する。先行研究では、学習によって心理学のイメージが実態に沿うものに変容することが示されている（岩崎他，2012；松井，2000）。これが言語心理学においても同様であるかを検討する。

方 法

参加者 大学生 200 名が調査に参加した。不備のあった回答を除き 172 名（男性 68 名，女性 104 名）で，18 歳 0 ヶ月～25 歳 4 ヶ月であった。参加者の特性を Table 1 に示した。参加者は口頭と書面で調査内容の説明を受け，同意書に署名した。調査の内容および手続きについては，あらかじめ法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会の了承を得ていた（平成 29 年 4 月 3 日承認番号：17-0001）。

質問項目 質問紙は，言語心理学において学べると思う項目と言語学において学べると思う項目，

Table 1
参加者特性一覧

学 年	学 科	未 習	既 習		小 計
			言語心理学	言語学	
1 年生	心理学	62	0	0	62
2～4 年生	哲学	9	0	1	10
	日本文学	1	1	8	10
	英文学	5	0	15	20
	史学	7	0	4	11
	地理学	1	0	0	1
	心理学	41	12	5	58
	その他*	4	0	0	4
合 計		130	13	33	176**

* 注 1) 「その他」の学生は，文学部以外の文系学部にも所属していた。

** 注 2) 両学問既習者が 4 名いたため，合計の数は 176 となっている。

参加者の特性や参加者の学習経験に関する質問項目で構成された。学問イメージに関する質問では、言語心理学において学ぶことができる項目を 16 個、言語学において学ぶことができる項目を 16 個選出し、全 32 項目を選択肢として提示した。

各学問イメージに関する項目は、言語心理学あるいは言語学の概論書の目次より、調査者が作成した。言語心理学の概論書として福田（2012）と重野（2010）、針生（2006）と、言語学のそれとして大津（2009）と黒田（2004）、中島・外池

Table 2
質問項目一覧

学 問	下位分類	番号	項目略称	質問項目
言語心理学	読み	1	一文の理解の仕組み	一文の理解の仕組みを知る
		2	文章理解のプロセス	文章の理解の過程を知る
	書き	3	話し言葉と書き言葉の違い	話し言葉と書き言葉の違いがわかる
		4	読み手に配慮した書き方	読み手に配慮した書き方を学ぶ
	第二言語習得	5	第二言語学習	効果的な第二言語学習を学ぶ
		6	留学効果	留学の効果を知る
	ことばの障がい	7	言語障がい	言語の障がいについて知る
		8	脳と言語の関係	脳と言語の関係を学ぶ
	言語発達	9	言語発達	言語発達について学べる
		10	単語学習	どのように単語を学習するのかを知る
	言語と思考	11	言語による認識への影響	言語による認識への影響が学べる
		12	言語と思考に関する研究の流れ	言語と思考に関する研究の流れがわかる
	コミュニケーション	13	動物のコミュニケーション	動物のコミュニケーションがわかる
		14	ジェスチャー	ジェスチャーについて学べる
	心的辞書	15	心的辞書	心の中の辞書を知る
		16	単語認識のプロセス	単語の認識のプロセスを知る
言語学	音声学	17	音の表記の仕方	言語の音を書き表す方法を知る
		18	発音の仕組み	発音の仕組みを学べる
	音韻論	19	音の機能	日本語の音の機能を学べる
		20	アクセントの法則	アクセントの法則を知る
	形態論	21	単語の構造	単語の構造を学べる
		22	単語の成り立ち	単語の成り立ちを学べる
	語用論	23	会話暗示の理解	会話で暗示されている意味がわかる
		24	状況に応じた言葉の意味の理解	状況に応じた言葉の意味がわかる
	統語論	25	文の構造	文の構造を学べる
		26	文法理論	文法に関する理論を学べる
	意味論	27	単語や文の意味	単語や文の意味を知る
		28	比喩表現	比喩の世界を知る
	応用	29	世界の言語の多様性	世界の言語の多様性を知る
		30	方言の多様性	さまざまな方言を知る
	言語獲得	31	言語獲得のメカニズム	言語獲得のメカニズムを学べる
		32	バイリンガル	バイリンガリズムを学べる

注) 本文中で質問項目について言及する際は、番号の数字と項目略称を用いる。

(1994)を使用した。これらの概論書は、出版年が1994年以降で、網羅的な目次構成であり、「入門」「はじめて」「招待」といった文言が題名や序章などに入っていることを基準に選出された。学問イメージに関する項目の詳細は、Table 2に示した。なお、言語心理学と言語学の専門家1名ずつに、項目の内容を検討してもらい、内容的妥当性を確認した。

参加者の学習経験については、言語心理学や言語学の授業を受講した経験があるか、また、ある場合は授業名の記述を求めた。言語心理学の授業の受講経験があると答えた者を言語心理学既習者、言語学の授業の受講経験があると答えた者を言語学既習者とした。

手続き 調査は集団形式で実施し、所要時間は15分程度であった。言語心理学に対して、32項目から言語心理学で学べると思う項目を複数選択させた。言語学に対しても同様に回答させた。回答の偏りを排除するため、項目の並びのパターンを複数作成し、ランダムに配布した。また、順序効果を相殺するため、半数の参加者には言語心理

学で学べると思う項目、もう半数の参加者には言語学で学べると思う項目から回答させた。なお、回答は調査者の口頭の指示によって統制した。

結果・考察

本研究の目的は、未習者が抱く言語心理学の学問イメージを探ることと、学習経験によってそれがどのように変化するかを探索的に検討することである。その際、言語学の学問イメージと比較しながら考察を行う。そのため、最初に両学問分野を学んだことがない参加者の学問イメージを、その後、学習経験の有無が学問イメージにどのように影響するかを検討する。なお、今後本文中で質問項目について言及する際は、Table 2の番号と項目略称を用いる。

未習者のイメージ：言語心理学 両学問分野未習者が心的に持っている言語心理学のイメージの特徴を把握するために、コレスポネンズ分析を行った。Figure 1にはコレスポネンズ分析の結果を示し、Figure 2に各項目の選択者の割合

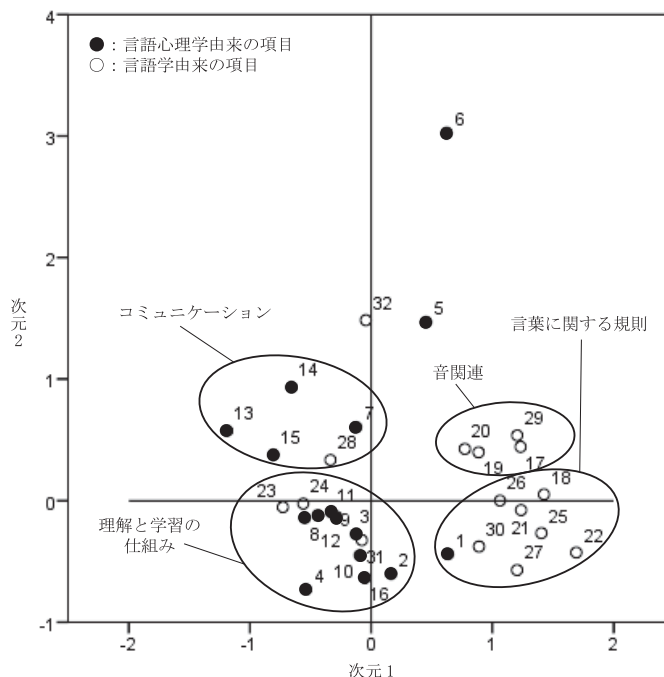


Figure 1. 両学問分野未習者による言語心理学のイメージ。なお、数字はTable 2の番号を示す。

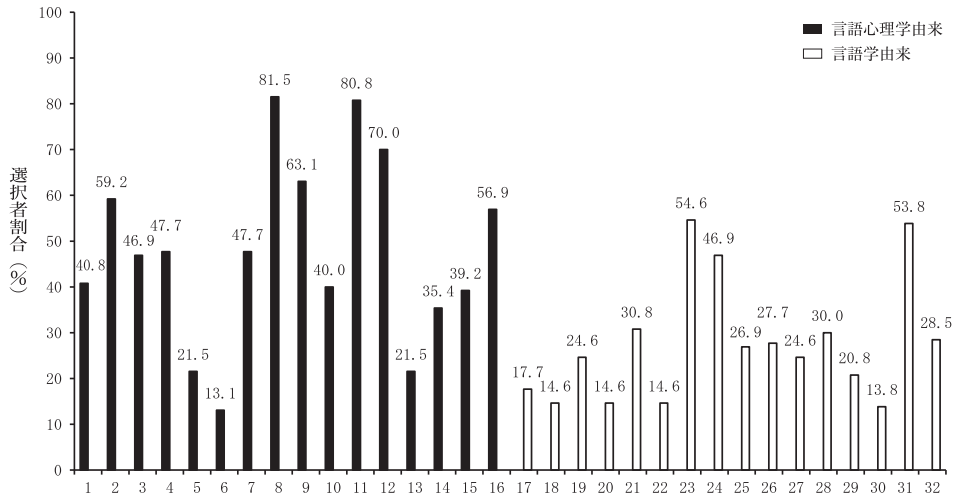


Figure 2. 両学問分野未習者における言語心理学で学べる項目の選択者割合。
なお、数字は Table 2 の番号を示す。

を示した。

Figure 1 より、次元 1 の正の方向に 22「単語の成り立ち」や 25「文の構造」といった外的な事柄を対象とした項目が多く付置された。一方、負の方向には 15「心的辞書」や 23「会話暗示の理解」といった内的な対象が多かった。これより、次元 1 は「内的－外的」次元といえる。次元 2 の正の方向には 7「言語障がい」や 29「世界の言語の多様性」といった音声言語に関する事項が付置され、負の方向には 4「読み手に配慮した書き方」や 2「文章理解のプロセス」といった文字言語に関する事項が多く認められた。よって、次元 2 は「書き言葉－話し言葉」次元といえる。

また、近くに付置された項目同士のまとまりは、Figure 1 のように 4 つのグループに分かれた。次元の意味をあわせて考察すると、外的で話し言葉に関連する 19「音の機能」や 20「アクセントの法則」などが含まれるグループ 1 は「音関連」の項目が集まっていると考えられる。グループ 1 の項目平均選択率は $M = 19.4\%$ で非常に低かった。13「動物のコミュニケーション」や 14「ジェスチャー」といったグループ 2 は、内的で話し言葉に関連する内容であるため「コミュニケーション」のグループと考えられる。グループ 2 の項目平均選択率は $M = 34.8\%$ で低めであった。内的で書き

言葉に関連する 11「言語による認識への影響」や 8「脳と言語の関係」などが含まれるグループ 3 は「理解と学習の仕組み」を表している。グループ 3 の項目平均選択率は $M = 58.5\%$ で高めであった。外的で書き言葉に関連する 26「文法理論」や 21「単語の構造」などが含まれるグループ 4 は「言葉に関する規則」の項目が集まっていると考えられる。グループ 4 の項目平均選択率は $M = 24.2\%$ で低かった。一方、5「第二言語学習」や 6「留学効果」、32「バイリンガル」は、他の項目から遠く付置されている。また、それぞれの選択率も 21.5%, 13.1%, 28.5% と低かった。

これらのことから、未習者が持つ言語心理学の学問イメージは、「音関連」や「コミュニケーション」、「理解と学習の仕組み」、「言葉に関する規則」に広がっている。また、選択率から考えると、言語心理学は主に「理解と学習の仕組み」を学ぶ学問分野であると捉えられていることがわかる。一方、言語心理学由来の項目が多い「コミュニケーション」や言語学由来の項目が多い「言葉に関する規則」と「音関連」、そして外国語学習に関する項目はあまり学ぶことができないと考えられている。つまり、未習者は言語心理学を、言語に関連した一部分を学ぶ学問として捉えていることがわかった。

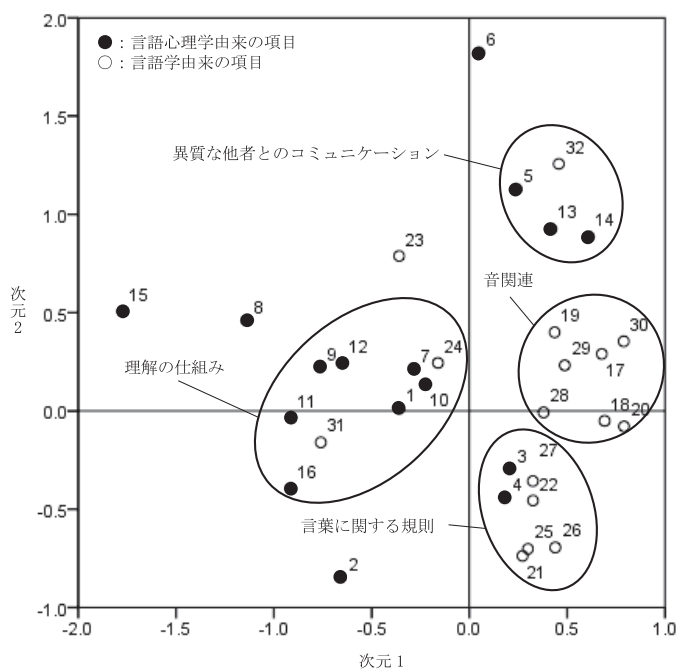


Figure 3. 両学問分野未習者による言語学のイメージ。なお、数字は Table 2 の番号を示す。

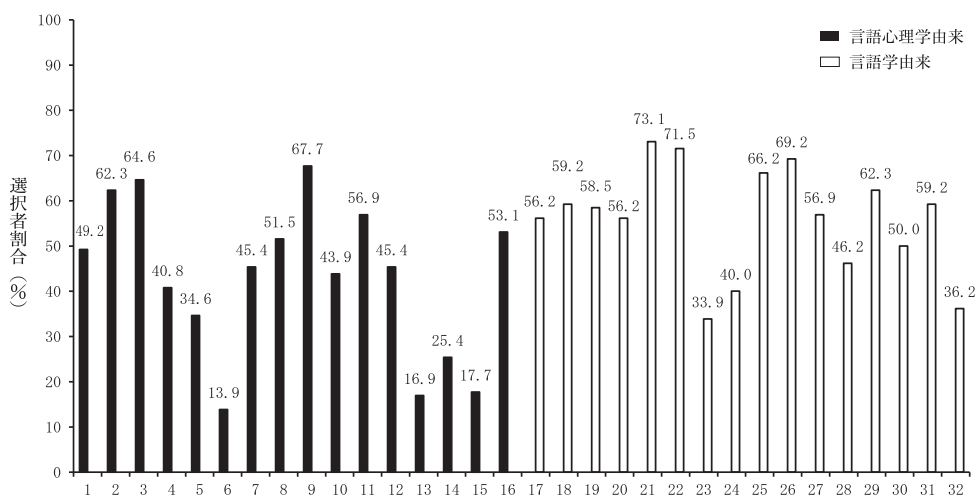


Figure 4. 両学問分野未習者における言語学で学べる項目の選択者割合。
なお、数字は Table 2 の番号を示す。

未習者のイメージ：言語学 両学問分野未習者が抱いている言語学のイメージについてコレスポネンダ分析を行った。Figure 3 にはコレスポネンダ分析の結果を示し、Figure 4 に各項目の選択者の割合を示した。

Figure 3 の次元 1 の正の方向に 20「アクセシ

ブの法則」や 30「方言の多様性」といった外的な事柄を対象とした項目が多く付置された。一方、負の方向には 11「言語による認識への影響」や 16「単語認識のプロセス」といった内的な事柄に関連した項目が多かった。これより、次元 1 は「内的-外的」次元といえる。次元 2 の正の方向

には19「音の機能」や32「バイリンガル」といった音声言語に関する項目が付置され、負の方向には21「単語の構造」や25「文の構造」といった文字言語に関する項目が多く認められた。よって、次元2は「書き言葉－話し言葉」次元といえる。

また、近くに付置された項目同士のまとまりをFigure 3のように4つのグループに分けた。次元の意味をあわせて考察すると、グループ1は、外的で話し言葉に関連している。さらに、13「動物のコミュニケーション」と14「ジェスチャー」や、自分とは異なる他者が意識されているであろう5「第二言語学習」や32「バイリンガル」が含まれるため、グループ1は「異質な他者とのコミュニケーション」と考えられる。グループ1の項目平均選択率は $M=28.3\%$ で低かった。11「言語による認識への影響」や12「言語と思考に関する研究の流れ」といったグループ2は、言葉の媒体に関わらない内面的な内容であるため「理解の仕組み」とした。グループ2の項目平均選択率は $M=51.2\%$ で高かった。外的で書き言葉に関連する25「文の構造」や26「文法理論」などが含まれるグループ3は「言葉に関する規則」を表している。グループ3の項目平均選択率は $M=63.2\%$ で非常に高かった。外的で話し言葉に関連する17「音の表記の仕方」や19「音の機能」などが含まれるグループ4は「音関連」の項目が集まっていると考えられる。グループ4の項目平均選択率は $M=55.5\%$ で高かった。一方、2「文章理解のプロセス」や6「留学効果」、8「脳と言語の関係」、15「心的辞書」、23「会話暗示の理解」は、他の項目から遠く付置されている。また、選択率も6「留学効果」13.9%と15「心的辞書」17.7%、23「会話暗示の理解」33.9%と低かった。他方、2「文章理解のプロセス」は62.3%、8「脳と言語の関係」は51.5%であり選択率は高かった。

すなわち、未習者の言語学の学問イメージは、「異質な他者とのコミュニケーション」や「理解の仕組み」、「言葉に関する規則」、「音関連」に広がっている。また、選択率を考慮すると、言語学とはコミュニケーション以外の言語に関連する内

的な事項や外的な事項を、言語心理学由来の項目も含めて広く学べる学問と捉えられていることがわかる。

未習者における各学問イメージの比較 未習者の各学問イメージをまとめると、以下のようなことが示唆される。各学問イメージは比較的広いものであり、かつ、それぞれの学問由来の項目がまとまっているわけではなかった。つまり、未習者にとっては、両学問ともにその学問分野独自の明確なイメージは形成されていない。また、選択率の結果から、言語学の方が言語心理学よりも言葉に関連する多くの項目を学べると思っていることがわかった。

本研究における未習者とは、言語心理学も言語学も学んでいない者を指している。すなわち、この2つの学問分野に関しては高校生と同じ水準の知識しか持っていないと考えられる。このような参加者にとっては、言語心理学由来の事項か言語学由来の事項かに関わらず、言語学の方が言語心理学よりも幅広く、言語に関する事項を学べると期待していると示唆される。よって、両学問分野を学んでいない高校生が、進路選択の時に言語に関連する学習をしたいと思った際には、言語心理学を有する心理学科よりも言語学を有する学科を選択する可能性が高いと考えられる。

既習者のイメージ：学習経験の影響 次に、言語心理学由来の項目と言語学由来のそれを学習経験別にどれだけ正確に判別しているかを検討する。その際、信号検出理論に基づき d' 値を算出した(小澤・大杉・牧野, 2015)。例えば、言語心理学において、言語心理学由来の項目を選択した場合はHit、言語学由来の項目を選択した場合はFalse Alarm、言語心理学由来の項目を選択しなかった場合はMiss、言語学由来の項目を選択しなかった場合はCorrect Rejectionとして算出した。言語心理学と言語学に関する各 d' 値を従属変数とした1要因2水準(学習経験：未習・既習)の被験者間計画の分散分析を行った。

分散分析の結果より、言語心理学に関する学習経験の主効果には有意傾向がみられた($F(1,$

114) = 2.92, $p = .09$, $\eta^2 = .020$)。既習者の精度 ($M = .95$, $SD = .78$) は未習者のそれ ($M = .63$, $SD = .63$) よりも高い傾向にあった。言語学に関しては学習経験の有意な主効果がみられた ($F(1, 161) = 6.21$, $p = .05$, $\eta^2 = .037$)。既習者の精度 ($M = .74$, $SD = .70$) は未習者のそれ ($M = .38$, $SD = .73$) よりも有意に高かった。

つまり、言語心理学や言語学を学ぶことにより、学んだ分野の事柄を正確に判別しているといえる。特定の学問分野を学習することで、その分野の輪郭が明確になるといえよう。

既習者のイメージ：言語心理学 学習経験によって学問イメージが変化するかを検討するために、言語心理学既習者の言語心理学の学問イメージについて、未習者と同様にコレスポネンス分析を行った。なお、本調査は横断的な調査である点と既習者の数が少ない点に注意をしながら、考察を行いたい。Figure 5 にはコレスポネンス分析の結果を示し、Figure 6 に各項目の選択者の割合を示した。

Figure 5 の次元1の正の方向に3「話し言葉と

書き言葉の違い」や16「単語認識のプロセス」といった項目が付置されていることから、すべての人間の言語活動を理解するための「言語活動に関する法則」を表わす。一方、負の方向には14「ジェスチャー」や30「方言の多様性」といった様々な現象にまつわる項目が多く付置されていることから、「現象の多様性」と考えられる。これより、次元1は「現象の多様性—言語活動に関する法則」次元といえる。次元2の正の方向では10「単語学習」や25「文の構造」といった外的な対象に関連する項目が多かった。一方、負の方向には、1「一文の理解の仕組み」や11「言語による認識への影響」といった内的な対象に関する項目が付置されていた。このことより、次元2は「内的—外的」次元と考えられる。

Figure 5 にあるとおり、5「第二言語学習」や6「留学効果」、13「動物のコミュニケーション」、14「ジェスチャー」以外の言語心理学由来の項目と、言語学由来の31「言語獲得のメカニズム」が、類似したイメージとして原点近くにまとまって付置されていた。これらは「言語心理学由来の

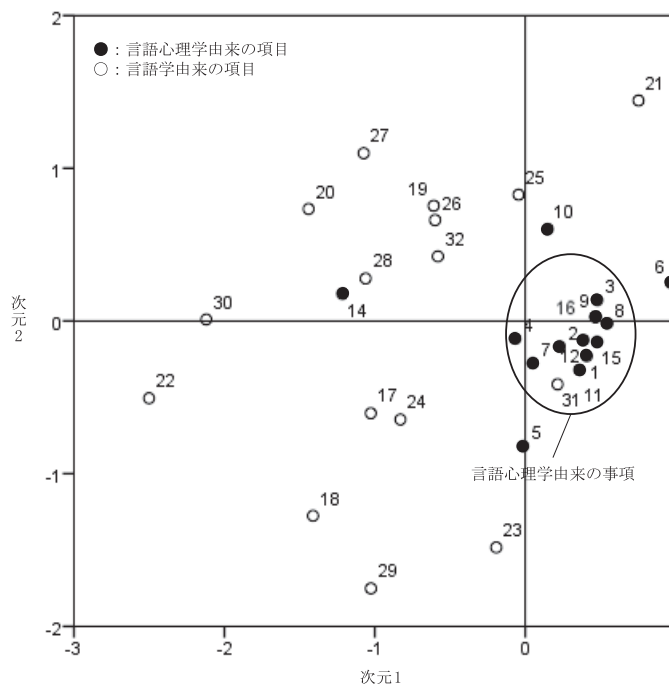


Figure 5. 言語心理学既習者による言語心理学のイメージ。なお、数字は Table 2 の番号を示す。

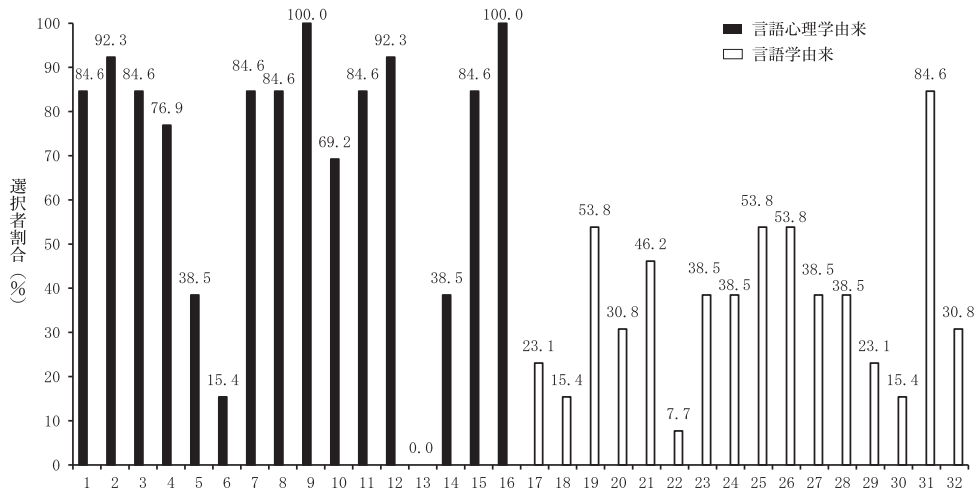


Figure 6. 言語心理学既習者における言語心理学で学べる項目の選択者割合。
なお、数字は Table 2 の番号を示す。

事項」のまとまりといえよう。この項目平均選択率は $M=88.1\%$ と非常に高かった。一方、このまとまりから外れた言語心理学由来の項目である 5「第二言語学習」や 6「留学効果」、13「動物のコミュニケーション」、14「ジェスチャー」の項目選択率は 38.5%、15.4%、0.0%、38.5% と低かった。同様にまとまりからは外れている 10「単語学習」のみ、項目選択率は 69.2% と高かった。

このように、既習者の言語心理学のイメージは、おおむね言語心理学由来の項目がまとまっている。つまり、学習を通して、言語心理学の学問イメージは、比較的広いイメージからある程度収束したと考えられる。それらは、主に人間の言語に関連する内的活動、つまり言語心理学とは言語活動を理解するための法則を追求する学問と捉えられていることがわかる。

既習者のイメージ：言語学 言語学既習者の言語学の学問イメージを把握するために、コレスポンデンス分析を行った。Figure 7 にはコレスポンデンス分析の結果を示し、Figure 8 に各項目の選択者の割合を示した。

Figure 7 の次元 1 の正の方向に付置されている項目は、21「単語の構造」や 26「文法理論」といった言語に関連する基礎的な内容となっており「基礎」を表している。一方、負の方向には 4

「読み手に配慮した書き方」や 23「会話暗示の理解」といった文脈を考慮した項目が多く付置されていることから「応用」と考えられる。これより、次元 1 は「応用—基礎」次元といえる。次元 2 の正の方向には 11「言語による認識への影響」や 24「状況に応じた言葉の意味の理解」といった「書き言葉」に関連する項目が付置されている。一方、負の方向には 19「音の機能」や 30「方言の多様性」といった「話し言葉」に関連する項目が付置されている。このことより、次元 2 は「話し言葉—書き言葉」次元と考えられる。

Figure 7 にあるとおり、言語学既習者の言語学の学問イメージは大きく 1 つにまとまる。原点付近に、言語学由来の項目と、4「読み手に配慮した書き方」や 6「留学効果」、10「単語学習」、13「動物のコミュニケーション」、15「心的辞書」を除いた言語心理学由来の項目が含まれており、これらは「言語に関連する事項」といえよう。項目平均選択率は $M=60.7\%$ で高かった。一方、このまとまりに含まれなかった言語心理学由来の項目の選択率は 33.3%、9.1%、45.5%、12.1%、18.2% と比較的低かった。

このことから、言語学既習者が言語学で学べると思う項目は、言語心理学既習者のそれと同様に、原点付近に収束している。未習者が捉えていたそ

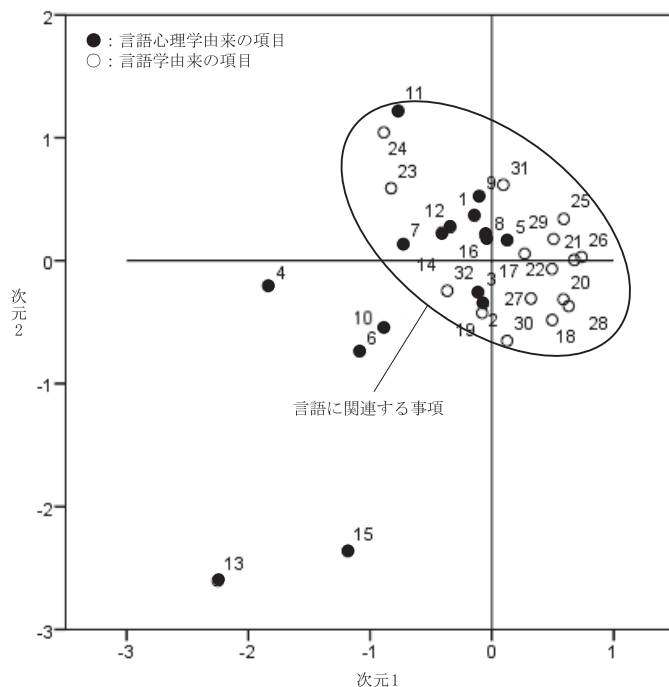


Figure 7. 言語学既習者による言語学のイメージ。なお、数字は Table 2 の番号を示す。

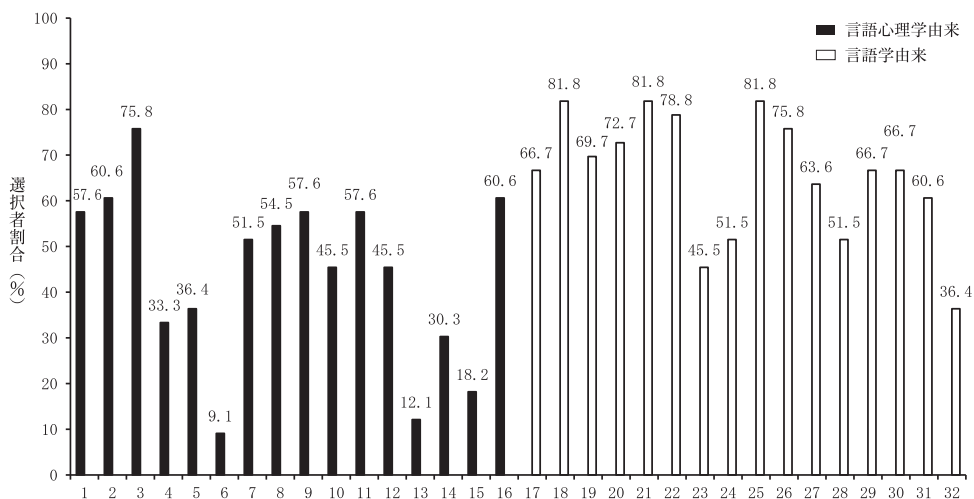


Figure 8. 言語学既習者における言語学で学べる項目の選択者割合。

なお、数字は Table 2 の番号を示す。

それぞれのグループが一つにまとまっている点は、言語心理学と同様に学習の成果といえよう。しかしながら、言語心理学の場合は、学習経験を経ることにより、学べる対象としておおむね言語心理学由来の項目をイメージしている。一方、言語学の場合には言語心理学由来の項目も含んだ広い内

容が学問対象として認識されている点異なる。

未習者と既習者のイメージの比較 言語心理学に対する未習者の学問イメージは、「理解と学習の仕組み」を中心とし、拡散していた。一方、既習者においては、未習者が選択していなかった言語心理学由来の7「言語障がい」と15「心的辞書」

も他の項目と同様に原点付近に付置された。さらに、判別精度も既習者の方が未習者よりも高かった。つまり、言語心理学の授業を履修するという経験を通して、言語心理学の学問イメージは比較的広いイメージから、言語使用を対象とした人の認知活動を学べる学問イメージに収束したと考えられる。

他方、未習者の言語学の学問イメージは言語心理学の学問イメージと同様に拡散し、かつ、言語心理学よりも多くの項目を学べる学問であるとイメージされていることがわかった。また、言語学既習者の言語学の学問イメージは、言語心理学既習者のそれと同様に、学べる項目が原点付近に収束し、判別精度も既習者の方が未習者よりも高かった。つまり、未習者が別々に捉えていた各グループの項目が精度良く一つにまとまっている点は、言語心理学と同様に学習の成果である。しかしながら、既習者の言語学の学問イメージは、言語心理学由来の項目も含んだ言語一般に関わる広い内容が学問対象として認識されている点が、言語心理学のそれと異なる。

このように、言語心理学でも言語学でも、各学問分野を学ぶことによって、各学問由来の項目の選択率は高く、まとまって付置されるようになる。つまり、どちらの学問においても学ぶ経験によりその学問のイメージが明確になったといえる。しかしながら、両学問イメージではその収束の仕方が異なっていた。言語心理学は、主に言語活動を理解するための法則を追求する学問というイメージに収束する。一方、言語学は、言語心理学由来の項目も含んだ言語一般に関わる学問というイメージに収束することがわかった。これは、言語学の学問領域の方が心理学の一分野である言語心理学よりも大きいことを勘案すれば当然の結果であるため、本調査の結果の妥当性を担保していると考えられる。

本研究で得られた知見と限界 本研究の目的は、未習者が抱く言語心理学の学問イメージを探ることと、学習経験によってそれがどのように変化するかを言語学のそれと比較しながら、大学生を対

象に探索的に検討することであった。学問イメージに関するコレスポネンス分析と項目選択率、判別精度 (d' 値) に関する分析の結果、次のことがわかった。未習者が持つ言語心理学の学問イメージは言語学と同様に拡散していた。特に、未習者は言語心理学を「理解と学習の仕組み」を学ぶ学問であり、言語学よりも狭い学問イメージを持っていた。一方、既習者による学問イメージは両学問分野ともに未習者よりも明確であった。言語心理学既習者による言語心理学の学問イメージは言語心理学由来の項目で構成されていた。他方、言語学既習者による言語学の学問イメージは両分野由来の項目で構成されていた。つまり、学習経験により、言語心理学は言語活動を理解するための法則を追求するという、言語学に比べて狭い学問イメージに収束し、それは学問の実態におおむね即している。

これらの知見から、限界はあるものの学校適応に関して、次のようなことが示唆されるだろう。まず、人間が言語を使用する際の普遍的なプロセスを学習したい場合には、言語学よりも言語心理学を選択した方が、学習したいことと学問内容の間の整合性がより高いだろう。したがって、両学問分野とも学んでいない人が言語に関わる事項を学習したいと思ったとき、言語に関連する人の認知活動に興味があるのか、それとも言語の規則を含めた広い興味があるのか等、自らの学習目標を明確にする必要がある。それによって、学問イメージと実態の乖離が小さくなり、学校適応感が高まる可能性があると考えられる。

一方、本研究では「言語心理学／言語学の授業を受講した経験はありますか?」という質問項目で「はい」と回答した参加者を言語心理学／言語学既習者とした。授業の内容に関しては、参加者の負担を考慮したため、質問は行わなかった。よって、本調査では、言語心理学／言語学の授業で他の学問由来の項目を教授された可能性を排除しきれず、この点に関しては今後の課題である。また、本研究においては、言語に関わる研究分野として言語心理学と言語学を比較したが、他にも日本語

学・国語学や英語学，国語教育学，日本語教育学などといった学問分野も存在する。これらの分野と言語心理学の学問イメージの比較を通して，より言語心理学の学問イメージが明確になるだろう。この点に関しても今後の検討課題である。

引用文献

- 福田由紀（2012）．言語心理学入門 言語力を育てる 培風館
- 針生悦子（編）（2006）．言語心理学 朝倉心理学講座5 朝倉書店
- 林 都子（2013）．心理学は理系か文系か：SD法を用いた学問イメージ調査による検討 人文論究（北海道教育大学函館人文学会），82，23-35.
- 五十嵐靖博・平尾元尚・中村延江（1999）．美容専門学校生の心理学観：二つの文化（Kimble, 1984）の検討 山野研究紀要，7，33-39.
- 岩崎智史・大橋 恵・皆川 順（2012）．心理学に対するイメージ(1) 心理学専攻学部生と非心理専攻学部生と対象とした横断的研究 東京未来大学研究紀要，5，1-9.
- 工藤与志文・鈴木健太郎・小林好和（2004）．大学生の心理学に関する「素朴概念」：本学人文学部生を対象にして 札幌学院大学人文学会紀要，76，1-16.
- 黒田龍之介（2004）．はじめての言語学 講談社現代新書
- 松井三枝（2000）．はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化——「心の科学」受講前後の調査から—— 研究紀要：富山医科薬科大学一般教育，23，63-68.
- 中島平三・外池滋生（編）（1994）．言語学への招待 大修館書店
- 小川一美・植村善太郎・元吉忠寛・吉田俊和（2001）．大学生の適応過程に関する研究(9)——学問イメージと学習取り組みおよび教官などに対する態度の関係—— 日本教育心理学会第43回総会発表論文集，659.
- 大津由起雄（編）（2009）．はじめて学ぶ言語学——ことばの世界をさぐる17章 ミネルヴァ書房
- 小澤 良・大杉尚之・牧野義隆（2015）．断片的な場面情報の時間的保持特性 認知心理学研究，12，77-87.
- 重野 純（2010）．言語とところ 新曜社
- 高島直子・中村延江（2002）．美容専門学校生の心理学観(Ⅱ)：1998年（五十嵐他，1999）との比較 山野研究紀要，10，59-66.
- 植村善太郎・小川一美・吉田俊和（2001）．大学生の適応過程に関する縦断的研究(2)：大学生の学習への取り組み，および大学生活満足感に関連する要因の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，心理発達科学，48，29-43.

What can We Learn in Psychology of Language?: Comparison with Linguistics by Correspondence Analysis

FUKUDA Yuki, HAGIWARA Haruka, and KIKUCHI Risa

Abstract

The present study exploratorily investigated the image toward psychology-of-language held by students who have learned the subject and those who have not, and compared it to the image that students held toward linguistics. We picked up 32 items that students can learn in psychology-of-language (16 items) and linguistics (16 items). A group of 172 university students were asked to select multiple items which they thought they could learn in psychology-of-language or linguistics. Participants were divided into 4 groups according to learning experience and academic discipline, and their images were compared by correspondence analysis. Results indicated that (1) students who have not studied either subject considered psychology-of-language as an academic discipline in which they could learn about some aspects of language, (2) they did not have a clear image of either psychology-of-language or linguistics, and (3) they thought they could learn less in psychology-of-language than in linguistics. On the other hand, the results also revealed that (1) students who have learned either or both subjects could recognize correct learnable items in both psychology-of-language and linguistics, (2) the items from psychology-of-language were contained in the image for psychology-of-language, and (3) those from both psychology-of-language and linguistics were contained in the image for linguistics. These results suggest that students who have learned psychology-of-language consider the subject as an academic discipline pursuing the laws that help us understand language activities.

Keywords: Psychology of Language, Linguistics, images for academic disciplines, correspondence analysis